

[制作記録]

水墨壁画 共同制作プロジェクトについて

A Report on the Co-production Project for Black-and-White Wall Drawings

荒木 恵信
ARAKI Keishin

はじめに

平成27年9月初旬、京都のある方から作品制作の依頼について相談があった。この依頼者が経営する店舗の壁面に絵画を制作して欲しいという内容だった。作品制作に関していくつかの条件があった。その第1の条件は、「学生に描いて欲しい」というものである。第2は、店舗の雰囲気を演出するよう、水墨による表現であること。第3に10月初旬に完成すること。第4、壁面の大きさは、およそ縦2m50cm×横4mである。制作期間と画面の大きさを考慮するとかなり厳しい条件だと感じた。しかし、水墨壁画の制作を体験できる貴重な機会でもあり、この条件で制作に参加する学生が集まるようならば引き受けようと考えた。日本画専攻の学部生3名から参加の希望があった¹。これにより期間は少々短い、その分たいへん充実した内容の「水墨壁画 共同制作プロジェクト」がスタートした。およそ1ヶ月のプロジェクトは、次の計画で進めた。依頼者との打合せ。これを受けて作品の下図を提案。和紙など画材の準備。採用された下図から本画を制作。最後に納品をして完了である。本稿はプロジェクトの総まとめとして記述する次第である。

下図の制作

依頼者との打合せでは、京都を題材に学生の自由な発想によって、水墨を用いて描いて欲しいと説明を受けた。そして、店舗のデザインに呼応すること。作品の風景内に店舗を描き込んで欲しいとも希望を

述べられた。様々な会話の中には、依頼者の干支を描き込む提案もあった。

これを受けて学生は、それぞれ3点ずつアイデアスケッチを持ち寄り、自らのコンセプトを説明しながら披露した。その中から良いところをピックアップしてまとめ、3点の下図を作成した(図1から3参照)。依頼者に、この下図の中から好みのものを選択してもらった。決定した下図は、下図案3であった。



図1 下図案1 イメージは、「霊峰に守られた都に月光が射す。その喜びに呼応する京の賑わいと鴨川の乱反射。」霊峰に挟まれた賑やかな京都市街が、満月に照らされている風景。盆地を意識した手前と奥の山岳の配置が、市街の凝縮された空間を表現する一方で、月明かりがどこまでも広がる宇宙観を喚起させる。中央に流れる鴨川の悠久の流れに射込む月明かりは、街の熱気を静かに見守る静と動を演出する。本画では建造物や、大文字焼きなど名所をさらに描き込む。



図2 下図案2 依頼者の干支である馬が、霞が立ちこめる京都の峰峰を駆け巡る様子を描く。手前には白馬が向かって右方向に走る。天を仰ぐ様にまたは、未来を見据える様に

嘶く。画面後方中央には左方向へ向かう黒馬。画面に反時計回りの流れを生み出す。駆ける馬の様に力強く繁栄していく未来の姿でもある。



図3 下図案3 霊峰の麓に栄える東山と霊験な気象の展開。画面向かって左から、星空に満月、徐々に雲が立ちこめ遠くには落雷、そして雨。しかし、視点は画面下方の鴨川にそって再び左方向に向けられ、また星空へ。中景には雄々しくそびえ立つ量感のある山岳を配し、手前には俯瞰した古都東山の情景を描き込む。月明かりによる牧歌的な静寂と、雷雨による激しい躍動が対照的で、この森羅万象が鑑賞者の想像力をかき立てる。

材料準備

画面の大きさは、基底材として用いる入手可能な和紙の最大寸法を考慮して、縦1 m50cm×横4 mとした。縦1 m50cm×横2 mの画面を2枚横長に接合するのである。使用する和紙はドーサ液などで加工しない生の雲肌麻紙である。生の雲肌麻紙を用いることで墨汁の滲みや濃淡による表現に深みが得られ、また、雲肌麻紙の原料を直に感じられる紙肌によって、和紙独特の素朴さや自然感、視覚的に捉えられる暖かみを作品に付加できる。素材感を効果的に作品に取り込む方針である。

墨に関して、大画面の作品であり描かれるモチーフも多様であるため、墨色の幅を得る目的から青墨と茶墨を数種類準備した。これらに水を加えて墨の濃淡を表現すればたいへん多くの色調を得られる。

他に使用する色料としては、鋭い雨脚の表現などに用いる胡粉と、署名に用いる金泥がある。

筆は参加学生が普段使い慣れているものを使用した。筆にもいろいろな種類があり用途によって様々な名称がつけられている。その用途に添って使用することもよいだろうが、筆の特性を生かしながら自らの表現によって自由に使い分けてもよいだろう。

本画の制作 その1

決定した下図を本画のサイズに拡大印刷して、大下図とした。この大下図はおおよその形や構図がわかる程度のもので、細部は本画で直接描き込む手法をとる。そのため、本画制作の緊張感が持続されることとなる。大下図はバックライトを利用して本紙に透き写しされる(図4、5参照)。ここでは山岳や河川、繁華街や住宅地など大まかなあたりの描線や明暗、グラデーションの見当をつける(図6、7参照)。2枚が切り離された状態で描き進めなければいけないので、接合予定箇所がやや曖昧になってしまう。そのためこの段階では、接合したときにしっかりと描き込める余裕を維持しておくことが重要であり、曖昧さを活かしているといえる。

画面上部右の天空に雲が立ち籠める箇所(図8参照)に視線を向けると、黒雲には既に思い切った濃色を施す一方で、遠方の稲妻はまだ淡い色調である。これは稲光がその周囲に与える影響を模索している状態であろう。また、雨雲から降り下ろされる無数の雨脚の表現も見当がつけられている(図9参照)。これらには、強い輪郭線を用いず、墨汁の滲みの発生とその抑制とを上手に使い分けて雄大な自然感を表現している。

一方、川沿いの繁華街や住宅地には、雑居ビルや家屋が輪郭線を意識して描き込まれる。画面下部左の街並は、月明りと影との界にあたる部分である(図10参照)。建造物の人工的な形を意識した幾何学的な陰影と、街中に立ち籠める靄が同時に表現されていることが理解される。制作の初期段階から非常に繊細な表情を醸し出しているといえよう。これに続く画面下部中央は、晴れ渡る夜空から月明かりが注がれるため、建造物がはっきりと確認できる箇所となる。ここでは一棟一棟が丁寧に曖昧さなく描かれている(図11参照)。

水墨画制作は計画性がたいへん重要であり、根気よく着実に進めなければいけない。参加学生たちは自身の平素の日本画制作からそのことを自然に体得できているのである。

本画の制作 その2

前述のバックライトを使用して大下図を写す工程では、本紙2枚を別々に離して描かざるを得なかった(図12参照)。大下図から必要な箇所を写し終えたら、大下図から本紙を外し、簡易的に繋ぎ合わせて描き進める(図13参照)。この段階で接合箇所も違和感なく鑑賞できるよう手を加える。

墨汁は、本紙に一度つくると、その墨跡を消し去ることはできない。そのため、画面全体のバランスを確認しながら慎重に描き進めなければいけない。この時難しいのは、3名の共同制作である点だ。制作している作品画面に対する作画のバランス感覚は十人十色であろう。彼らにしてもその時その時の制作途中の画面から受けるアンバランスと、その解決方法が3者で同じであることは稀だったのではないだろうか。この様な時に重要なのはやはり、よく対話をして相手を受け入れ、この後各自が冷静になり、客観的に作品にとって最もよいと考えられる判断を実践することだろう。そして、画面の部分と全体とのバランスを取るため、作者たちは画面から離れて眺め、また近寄って細部を確認して筆を入れ、再び画面から離れて眺める行為を幾度ともなく繰り返すのである(図14、15参照)。

時を積み重ねて表現は益々進展する。大画面でありながら細部にも充実した表現を求め、繊細な筆づかいで墨色を重ねる(図16、17参照)。淡墨を何度も描き重ねることで微妙な色調とグラデーションの表現に成功し、作品に趣が現れる。3名がそれぞれ独自の筆づかいで表現を生み出すため、画面は変化に富んだタッチで魅力を増す。様々なタッチからは違和感は現れず、むしろ統一された自然風景へと発展する。

完成に近づいたこの段階で、描き進めたことによって本紙に生じた皺や歪み取り除くため、アクリル板を使用して仮張りを行う(図18参照)。仮張りとは、和紙の特性を活かして和紙に生じた皺などを取除く方法である。和紙に水分を加えることで和紙は伸びる。この状態の時に板に伏せ、和紙の四辺を

糊などで板に仮止めする。和紙は乾くに従って縮むため、ピンと張って皺がなくなる。重要なのは和紙に含ませる水分が適量であり且つ、全面に均一に湿りが入っていることである。今回の作品は水墨画であるため、基底材の和紙に水分を含ませても、色料である墨がその水分で流れてしまうことはないと考えられた。しかし、細心の注意を払い、できる限り少量の水分を本紙に入れた後、ビニールで全面を覆って時間をかけて蒸らし、アクリル板に張り込んだ。仮張りを終えたら本紙の余分な耳の部分の部分を断ち切り、完成時の寸法にした。これを2枚のパネルに張り込み仕上げを施す(図19参照)。

仕上げ

繁華街は非常に手の込んだ表現へと変貌する(図20参照)。見当の線描とたまかな雰囲気から描き始められた雑居ビルや家屋の構造が徐々に明確に描写される。これは近景のものばかりではなく後方に広がる街並についても同様である。さらに、これら建造物に人の営みの表現が加えられる(図21参照)。それはつまり窓から漏れる光、ネオンや車のライトなど人の生活で灯される明かりである。当然のことだが、墨で描くと画面は黒色になる。そのため、光を表現するにはその光から生じる影を墨で描くのである。

同じ建造物でも、京都の名所は分かりやすく配色されている(図22参照)。

前述の稲妻と雲の関係にもこだわりがみえ、厚く重い雲の移動により徐々に天候の荒れる兆しが表現されている(図23参照)。

大文字の炎や雨脚には、雲肌麻紙自体の白色とは質の異なる白色として胡粉を使用した(図24、25参照)。胡粉による重量感のある鋭い白色表現によって、画面を引き締める視覚的効果も得ている。

制作の最後に寸法の再確認をする(図26参照)。納品後、依頼者に迷惑をかけないためにも重要なチェック作業である。間違いがないことを確認し、作者である学生たちが署名をして完成とした(図27

参照)。

作品の完成 (図28参照)

俯瞰した京都が描かれている。

前景には鴨川を画面左右に通して描く。その畔には路地に沿って建ち並ぶ大小の店が客を迎えて賑々しい雰囲気である。四条大橋には自動車の往来も多いようだ。

中景には山岳が描かれ、墨色と筆のタッチによって密度のある深い闇夜から生じる霊験な雰囲気が表現された。その麓正面には清水寺や正法寺、その右手奥は稲荷山がある。また、左手後方には大文字山の炎も見える。京都の名所のなかに依頼者の店舗が描かれているのは、絵描きのサービス精神でもある。山岳が重なり京都の地理的特徴を示している。

この稜線の上方は遠景である。前述の夜空が変化に富んだ表情を見せる。画面左から右へと視線を移動すると、月明かりの眩しい宵から雲行きが怪しくなり、稲妻が轟く。次第に雨が降り出し豪雨となる。この天空の変化は地上にも影響を及ぼす。月のしらじらとした明かりはいつしか雲に遮られ、地上にその影を落とす。街のネオンはこの暗がりの中であすます輝きを増す。しかし、雲間に稲光が走ると完全な闇を山麓に作り出す。その闇を突き抜ける様に雨脚の軌跡だけが速い光となる。

作者たちはこれらの物語を違和感なく眼前に具現化させるため、墨の濃淡や暈し、筆の画面への接触や運び、墨汁の穂先への含み具合など、仔細な加減を何度も慎重に考え、思いを巡らせていたのである。見応えのある水墨壁画が完成した。

おわりに

慌ただしく始まった本プロジェクトは、勢いに乗ったまま突き進み、納品まで無事に終えることができた(図29参照)。これは学生たちの気力、根気と努力の成果である。作品もたいへん魅力あるものになった。

本プロジェクトの目的は、純粹に作品制作から始まったのだが、制作が進むにつれその目的だけでは収まらないことに気付かされた。このプロジェクトの制作では個人の制作とは異なる環境にあることで、各々が日本画を実直に追求したのではないだろうか。各々の自由な発想を3名の共通理解へと変換するためのフィルターとして「日本画」があったと考えられる。一般的に日本画がどの様なものであるかは曖昧とされるが、各々の解釈を共通なものへと集約できる概念であることが理解された。日本画が現代へさらに未来へと継承される所以を考察する機会となった。



図29 設置された作品
球体のランプシェードを夜空の満月に見立てている。

註

- 1 参加学生は、以下の通り。(平成27年度時点)
金沢美術工芸大学 美術工芸研究科 日本画専攻
2年 戸田伸英、柳室敦也、1年 乙部亮

謝辞

本研究にあたりまして多大なご協力とご指導を賜りました三島誠様、小西啓睦様、内藤克敏様、鈴木康雄先生、その他関係者の方々に深く感謝申し上げます。

(あらかき・けいしん 日本画専攻／文化財保存学)



図4 作業風景
バックライト用の木枠にアクリル板を固定する



図5 透き写し
本紙を透かして大下図を写す



図6 制作の初期段階 左本紙



図7 制作の初期段階 右本紙



図8 制作の初期段階 右本紙上部中央
稲妻の表現



図9 制作の初期段階 右本紙上部右側
稜線奥の雨雲、雨脚の表現



図10 制作の初期段階 左本紙下部左側
鴨川とその畔の建造物と霧の表現



図11 制作の初期段階 左本紙下部中央
鴨川沿いの繁華街の明確な表現



図12 制作風景 1
それぞれ別のバックライト用アクリル板に張り込まれた本紙



図13 制作風景 2
本紙 2 枚を簡易的に繋げた状態



図14 制作風景 3
各々が分担しながら制作を進める



図15 制作風景 4
本紙から離れて確認し、また描くことを繰り返す



図16 制作風景 5
細い筆で建造物の細部を描き込む



図17 画面上部右側
雨脚の部分。描き込みが進み、密度が増している



図18 仮張りにかける
湿りの具合を確認する



図19 制作風景 6
2 枚のパネルに張り込み仕上げをする



図20 画面下部左側
鴨川畔と街並



図21 画面下部右側
鴨川に架かる橋



図22 画面中央中程
山麓の清水寺と参道付近



図23 画面上部右側
稲妻の箇所。右側には龍が確認できる



図24 制作風景7
大文字の炎を胡粉で描き込む



図25 画面上部左側
大文字の炎煙も表現されている



図26 制作風景8
納品前に改めて寸法を確認する



図27 画面下部右端
作者3名の署名を金泥で書き、完成



図28 完成図
(撮影、画像処理：鈴木康雄)